

透明な力で人を動かす(その2) — 「自然体」の意味と「エネルギー的融合」の地平—

Controlling someone else with transparent force (2) : the meaning of “natural body” and the perspective of “energetic fusion”

菅原 浩

SUGAHARA, Hiroshi

キーワード：中心軸、武術、自然体、合気、身体性

Keywords : central axis, martial arts, natural body, aiki, corporeity

Following the previous paper, we made a further research with Izutsu Toshihiko's philosophical framework of the Non-Articulation and the Articulation into the phenomena that some mature martial artists can control their opponents without any physical force. We discussed the idea of “subtle corporeity” in relation to the concept of “natural body,” how to merge one's corporeity with that of someone else to achieve the “energetic fusion,” and the spiritual meaning of “central axis” in our corporeity.

はじめに

本稿は、前号に掲載した「透明な力で人を動かす—無分節／分節の世界モデルより理解された身体とエネルギーの関係について—」¹（以下「前稿」と呼ぶ）の考察を引き継ぎ、補足するものである。この前稿においては、力を入れずに人を動かすことができるという武術の技について、そのような現象が起きる原理を探求した。

現在、YouTube などでも、ほとんど力を入れずに相手を動かしているように見える動画をたくさん見ることができる。それらは、事情を知らない人々から見ればいかにも「やらせ」のようにも見える。だが、たしかにその一部には演出のものも混ざっているのかもしれないが、こうした現象は確かにあると、「現場」を知っている者としては断言できる。問題は、こうした現象が近代の支配的世界観からは解釈不能であるということだ。それは、むしろ近代的世界観の限界を示している。私はそれに代えて、東洋哲

学の共通基盤の探求より生まれた、井筒俊彦による「無分節／分節パラダイム」に基づいた世界観の検討を提言している。

前稿では、いわゆる「気で人を飛ばす」かのように見える現象は、相手とエネルギー的に融合した上で、相手の中の深い緊張を引き出し、それを解放するときには生じるものである、という仮説が提示された。そのためには、自分自身がより解放された、ゆるんだ状態である必要がある。いわゆる「自然体」ともいえる。それは、井筒俊彦のパラダイムにあてはめれば、より「無分節」に近い状態で存在することである、とも論じた。

本稿ではこうした議論をさらに進め、前稿とはやや異なる観点から、次の三点について哲学的ないし世界観的な考察を深める。

1. 「自然体」、ゆるんだ状態の本質的な意味（微細身体性の概念より）
2. 「相手とエネルギー的に融合する」とはどのようなことか
3. 「中心軸」の精神的意味

1 自然体と微細身体性について

自然体とは日常会話でもよく使われる言葉であり、気張らないとかリラックスしているという心の状態を表すことも多い。だがここでは、武術などで言われる、身体をもっとも理想的な状態にしたものを指すことにする。そもそも、本当の意味での自然体になることは簡単ではない。それを、身体の各部分がすべて協調して動き、バラバラなところがない状態だとすると、それはむしろ努力して作り上げる状態であり、大人になった人間はすでに「自然ではない状態」になっている。

武術に関心のある人々にはつとに知られていることであるが、およそ、力を使わずに相手を制することを主眼とする武術においては、「体がゆるんでいる」ということが何よりも肝要である。正確に言えば、最低限度の力のみを使って余分な力を一切使わず、かつ、身体は一本通ったような張りをもった状態になっていることが望まれる。

そのような「状態」を作ってしまうと、相手を崩すのに「技」はあまり必要としない。それよりも「ある状態」でそこにいることができれば、相手は勝手に無力化され、崩れるのである。それが、太極拳など「内家拳」と呼ばれる中国武術や、日本の合気術などで目指されていたことである。

ゆるんでいるということは、余分の力が入らず、身体の各部を連動した状態で使えるということである。普通の人の日常生活においては、全身を連動させることなく、手なら手、足なら足だけを動かして用を足そうという動き方に慣れ親しんでいる。このため、全身を連動させて使うことができる人は、想像を超える力を出すことができる。これも武術においては知られていることである。

註

¹ 長岡造形大学研究紀要、第17号、2019

だが、それだけではない。いわゆる自然体という状態には「エネルギーが通っている」と表現される要素も欠かすことはできない。これは「気」とも言われることがあるが、このエネルギーとはもちろん物理学的な意味のエネルギーではない。純粋に物理的なものではなく、一部、心や意識とも関わるものである。むしろ、「気」やここで言うエネルギーとは、物質としての身体と心・意識の双方にまたがり、その橋渡しをするものと考えられる。こうしたエネルギーが身体を中心を貫く中心軸となり、武術で言われる「正中線」をなすことも、重要視されることである。

もちろん、「物質のみが実在」だとする世界観（あるいは形而上学的立場）に立てば、「気」やこうしたエネルギーなど実在するものではない。しかし、それは近代が主張してきた一つのイデオロギーであって、21世紀の私たちはこの世界観を無条件に受容する必然性はない。

前稿でも、「気で人を動かす」とときには身体はより流動的な、より統合された状態になっているという趣旨のことを述べた。これはどういう意味か。ここで、そもそも「身体」とは何かということ考察しよう。

周知のように近代哲学は「意識」から出発していた。これに対し、「身体性」の問題は近代哲学の克服という過程で大きなテーマとなった。身体性を中心として作り上げられたメルロー＝ポンティの哲学や、あるいはそもそも「感じること」に初原を置くミシェル・アンリの哲学なども知られるところである。

井筒俊彦の哲学的世界観、あるいはそのベースとなった東洋哲学においては、原初にはすべてが分かれている「一」（すなわち無分節）のみがあり、すべてはそこから分節することによって生成するものである。「一」には意識と身体も分節しない。意識と身体もまた分節によって生成するものと言える。

ここで、身体というものの最も本質的な特徴は、身体には「内部」と「外部」があるということだと考える。これを「感じるもの」と「感じられるもの」の分節だと考えてもよい。「無分節／分節パラダイム」では、そもそも原初の無分節にはもちろんいかなる外部もなく、また内部もない。そこに「原初の分割」が生じて、はじめて内部と外部が生成する。この時また「私」と「私の外部」との分節が発生することになる。すなわち、身体性とはその原初の分割の瞬間に発生するものである。もちろんそれは私たち人間の身体性ではなく、私たちからみればはるかに統合された段階のものであるが。

そして、伝統的世界観の言うように、この分節の作用は幾多の段階において進行し、その分節化の末端に私たちが物質世界と呼ぶ世界次元があると措定してみよう。その物質の次元において展開する身体性が、私たちが肉体と呼ぶものである。

だが、肉体は、私たちがもつ身体性として唯一のものであろうか。もちろん近代的人間の常識としてはその通りであるが、武術が示す不可思議な現象は、そうした世界観の限界を示すものである。こうした現象は、私たちの身体性の概念の拡張を要求しているのである。身体性は何次元にもわたって層をなしているものであり、私たちはいわば多層的・多次元的な身体性を持つ存在ではなからうか。それ

は、そもそも世界が絶対的な無分節から発して、何層にもわたる分節化を繰り返して生成するからである。また、「私」という存在自体も、原初の無分節においてある「原・私」から分節化により何次元にもわたり内部・外部の分節化を繰り返した結果、著しく断片化した状態の「私」へと変容した段階を、私たちの通常の実存は生きているとも言える。

このパラダイムに立つ時、私たちの世界は、表面的には物質の世界であるかに見えるが、その背後には、「より分節性の少ない世界」も多次元的に同時存在しており、私たちに「より分節化の進行するベクトル」と「より無分節に近づいていくベクトル」の双方が作用している、という見方をすることができる。ここで、大雑把な言い方が許されるなら、前者を「物質性」、後者を「精神性」と呼ぶこともできる。

中国医学では「気の身体」というものがあるとされる。肉体とは異なる次元の身体性が肉体と重なるようにあるということである。さまざまな病はこの気の身体の乱れに起因し、そこから肉体次元に現れてくると考えられている。

気の身体は伝統武術でも当然のように語られている。気、あるいは最近ではエネルギーと呼ばれるものは、肉体よりも分節化が進行していない「気の身体性」の次元にある流れのごときのものである。そして、気の身体性は、トレーニングによってある程度コントロールする能力を身につけることもできる、とされている。それがいわゆる気功とも言われるものであるが、実は、本来治療や健康法であるところの気功法と、人を倒す技である武術とは非常に類似したものがある。正確に言えば武術は人を倒そうとするものではない。相手の攻撃意欲をなくし、力の入らない状態にさせ（無力化するという）、対立を無化することが本来の目的である。であるならば、本来の調和の状態に戻そうとする医術と共通してくることも理解できるだろう。

なぜ、相手を無力化することができるのか。そのためには、自分が「より無分節に近づいていくベクトル」に乗っていなければならない。つまり、より分節化の段階を戻り、より調和・統合された状態であるということだ。そのためには力み、緊張を抜かなければならない。なぜなら力みや緊張こそが「分節化のベクトル」であるからだ。力を抜くことはそのベクトルを逆転させ、調和に帰ることを意味している。

実際に、武術において相手を無力化し、力を入れずして動かすことができるということは、まず自分自身がより調和の状態にあり、対立をしていない身体性となっており（これがいわゆる「自然体」であろう）、さらにそれを何らかの方法で相手と共鳴させているものと思われる。そのことによって、相手の中に「より無分節（調和）へ近づいていくベクトル」が作用する。そうすると、そのベクトルは、相手の中にあつた緊張を解放する方向へ働く。この結果、筋肉を緊張させることが困難になり、また、緊張を解放するための自発的な動きが誘発されることもある——このように解釈することができそうである。

2 エネルギー的融合について

ここで、「相手と共鳴させる」とはどういうことか、ということである。いま、「より無分節の状態に近づいてい

る身体性」、すなわち、通常の日常意識に映じる物質的な身体性と異なる身体性を「微細身体性」あるいは「エネルギー的身体性」と呼ぶことにすると（本稿ではこの両者を同義に用いる）、この「微細身体性」には「他者と共鳴ないし融合する性質がある」ということになる。

微細身体性は、心の面から見れば深層心理学で言う「無意識」に対応すると見られる。日常の身体性が意識に対応するならば、微細身体性は通常は明確な意識のもとに作用しているわけではない。意識することのできない領域で作用するからこそ、武術として成立するという面もある。人間は無意識のレベルでさまざまな交流を行っているとも言われるが、これはある面から見れば、微細身体性・エネルギー的身体性の交流であるとも言える。そもそもこうした身体性のレベルにおいては、通常物質次元を構成する分節とは異なる世界分節によって機能しているのであるから、通常の時間・空間という世界分節性には完全に従わないのである。したがってそれは、ある程度、量子物理学で言うところの「非局所性」を有することになる。気の世界においては時間・空間に必ずしも限定されないものとされ、しばしば、時間や場所を離れた「遠隔」による気的作用などが行われる（たとえば熟達した気功師は「遠隔治療」ができるとされる）。肉体の接触を伴わなくてもエネルギー的身体性の交流は行われるのである。

微細身体性レベルによる交流をメインテーマに据えたものが、アーノルド・ミンデルによるプロセスワークである。プロセスワークは心理療法でありかつボディワークでもある、両者を統合したものである。ミンデルは微細身体性を「ドリームボディ」と呼び、人間はすべてドリームボディを交流しあっているという世界観に立つ²。むしろドリームボディの交流こそ世界の基底にあるものである。プロセスワークは、この無意識的なプロセスを一部意識化し、そこに適切に介入することによりある成果をもたらすことを狙いとする。ミンデルは自らのワークをシャーマンのワークにもたとえているが³、古代より存続し、近代社会では失われてしまった微細身体性のレベルに作用するワークを復活させているという自覚があるということだ。それは「気の文化の復権」というものともかなり近い距離にあるものと言えよう。

「透明な力で動かす」とされる武術では、相手に接触せずとも技がかかる場合もあるし、また、接触したとしてもほとんど力を入れず、基本的には触るのみである。つまり、そこに物理的な力を伝えようとする意図はない。むしろ、そこには微細身体性の交流、エネルギーの共鳴が発生している。肉体は同一空間に重なることはできないが、微細身体性にはそれが可能なのである。私たちは通常、無意識的に微細身体性で他者と交流することをよく起こしているのであるが、武術では訓練によって意図的にそれを行うことができるのである。

すなわち武術家は（もちろん武術家と言われる人の全てではない。むしろこれを意図している武術家は全体としては少数であるのが現状だが）、自らの身体性を高い調和の状態、無分節へのベクトルの入った状態へもっていき、その身体性を微細身体性（エネルギー）レベルで相手と同調させることで、相手の身体性の中にある攻撃性や対立性を中和させ、また、緊張という形で身体に存在するものを浮き彫りにしてそれを解放させるという作用を起こすのである。このようにして「相手が無力化する」ということや、攻撃意欲の消失といった結果をもたらすのである。

ここで、この「微細身体性の同調」は具体的にどのようにして行われるのかを見てみよう。前稿では、スコット・メレディス氏による「陰透勁 Yinjection」と「陰合勁 Yinfusion」について取り上げた。メレディス氏によれば、陰透勁とは相手に「陰エネルギー」を入れることにより、相手をコントロールしやすい状態に置くことであり、陰合勁とは、さらに完全に自分のエネルギーの体を相手のエネルギーの体と融合させることであるという。

彼の著書から引用すると、陰透勁においては、次のように言う。

ステージ1……相手の身体を軽くタッチして、そこへ陰のエネルギーを放射する。

ステージ2……軽いタッチで、相手のリアクションの規模や方向をコントロールする⁴。

ここでは、相手とのエネルギー的な同調が起こるステージ1に絞って見ていく。彼は、この「陰エネルギーの放射」を原子力の比喩で語る。つまり最初に中性子を射出したら、巨大な核爆発が誘発されるというわけだ。その射出については、こう言っている。

「自分の手が相手の身体に触れたら（実際には服に触れる）、中性子ビーム（パステルカラーの癒し光線でもいい）が指先や手から放射されるのをイメージしよう⁵」

すなわち射出とはもっぱら「イメージ」の領域での作業である。ここで重要なのは、微細身体性の領域はイメージと密接な関係があるということだろう。中国の気の文化においても、気はイメージによって動くということはよく言われているところである。また先述のアーノルド・ミンデルのワークはまさに「ドリームボディ」のワークであって、微細身体性は夢の次元であるイメージの世界でもある。イメージするとは、意識と無意識をつなぐ行為である。ということは、肉体次元と微細身体性の次元をつなぐことでもあるのだ。イメージとは意識が集中した状態ではなく、フォーカスのゆるんだ「薄明の意識」で行うものであり、それは夢と覚醒の中間状態でもある。そうした状態に入ったときに微細身体性のワークが成功しやすいということになる。

² アーノルド・ミンデル：ドリームボディ、誠信書房、2002

³ 同：シャーマンズボディ、コスモス・ライブラリー、2001

⁴ スコット・メレディス：太極拳パワー、p.195、BAB ジャパン、2013

⁵ 同書、p.197

⁶ 同書、p.197

またメレディスはこうも述べている。「エネルギーレベルで、あるいはエーテルレベルで我々は常に周りのの人たちとインタラクトしている。不規則に我々の意識とは別に、このインタラクションは起こっているのだ。推手（引用者注：太極拳での対人練習）の練習ではこのインタラクションを、秩序立て目標を立てて実践するのだ」⁶ ここでは明確に、微細身体性の交流は常に生起しており、それを意図的に行うことが武術なのだという見解が述べられている。

次に彼の言う「陰合勁 Yinfusion」についてはどうか。これは、自分のエネルギー的身体性を拡大させ、相手のそれをすっぽりと入れてしまう、という技である。そのことによって相手が無力化する。彼はこれが、大東流の佐川幸義の使っていた「合気」と同じであると言う⁷。

彼はここで、「これらは全て自分の頭の中でイメージするのだ。身体的な動きやパワーが伴わない陰エネルギーのパワーである」と書いている（原文では「すべては心のなかで行われる」となっているが「イメージを用いること」と解釈してよいだろう）⁸。陰透勁の陰エネルギーを使い続けることで陰合勁が達成できるとする。

メレディス氏は「気の身体」あるいはエネルギー的な身体性があるということを自明の前提としており、そうした非物質的な身体性の次元において自分と相手との融合をはかることが彼にとって「相手の無力化」を達成することになるわけである。彼はこれが太極拳の本質だと考える。それを達成するためには彼にとって「イメージが全て」なのである。微細身体性レベルの技はメンタルなワークなのだ。

次の例として、中野由哲氏^{よしのり}をとりあげたい。中野由哲氏は、様々な伝統武術に共通する要素を抽出し、その本質を追求するという武術研究家であるが、その著書において、この気の身体の融合を「クラッチング」と呼んで、詳細に語っている⁹。

中野氏にとっても、まず自分が完全に余分な力の抜けた状態になっていることは当然の前提である。また、武術の「型」には、エネルギーが流れやすいくみが入っており、「型」を正確にできるよう練習することで、エネルギーの流れる（調和的な）状態を自分の身体性において作る能力を養うことができると説く。

中野氏は、相手の無力化を促すには、相手とエネルギー的につながる「クラッチング」が必要だと言う。これは合気で言う「むすび」と同等のものである。具体的には、相手が攻撃していく、そのエネルギー（勢いのようなもの）に対し、自分も引かないでエネルギー的に受け入れて当たりに行き、かつ、そこからずれていくようにするのだ。

ここでの中野氏の方法のポイントは「受け入れる」というところにあるように思われる。前稿でもとりあげた則本純佑氏も、「受け入れる」ことや「利他の思い」で気

が通っていくと述べている¹⁰。また、冠光寺流柔術の創始者、保江邦夫氏は「相手を受容することによって投げる」という指導をしている¹¹。いずれもそうした受容的・拡張的な意識のあり方が影響すると述べていることには違いはない。中野氏のいう「受け入れる」「当たりに行く」も、対立を否定した世界に入るというメンタルなワークなのである。受け入れるということは「相手を吸収する」ことになり、メレディスの言う陰合勁の状態となるのであろう。

また、中野氏は「目付け」の重要性について語っている。目は相手だけを見るのではなく、まわりの空間全体を同時に見るような視野が必要になる。これは昔から「遠山の目付け」と言われてきたことである。また宮本武蔵が『五輪書』で語っている「観の目」である。相手だけを見るとそこに対立のエネルギーが生じる。これに対して遠山の目付けをすると対立を超えた世界を意識に入れることができるらしい。

中野氏によれば、「目付け」は、外形と内面的エネルギーをつなぐ鍵になる。具体的には、ある型を行う時、そこに意念（イメージ）を用いるが、このイメージと目付けを同時に用いることにより「内面のエネルギーを放出させる訓練」となるという¹²。

遠山の目付けと言われるものは、一点と同時に全体をも、その両方を視野に入れるもので、集中と拡散が同時に成立している状態である。おそらくこの目付けによって、意識のモードが変容するのだと思われる。軽い意識変容状態であるが、それはいわゆるゾーンに入るという意識モードでもありそうだ。

意識モードが変わるということは「空間の変容」も起こることになる。ここで「空間の変容」といっても、そこで言っている「空間」とはニュートン的な時空の空間ではない。その空間は身体性や意識とも密接に関連しており、近代が自明としていた均質な空間ではない。そもそも空間とは世界分節の一種態である。空間が意識とは独立したものと感じられるのは、ニュートン的な抽象的な時空の枠組みが近代世界には強いためである。この抽象的でいわゆる「客観的」な空間の意識は、同時に、自己の境界が明確に肉体によって限られているという意識のあり方とつながっている。これが物質主体的な空間の認知である。これは少なくとも近代社会の身体性のある方と対応する空間の認知とも言える。だが、そもそもカント以来の哲学では、空間とは認識形式であることが論じられてきた。世界とは共同主観的に成立するとも言われるようになったが、さらにそれを共身体性とも言うべきものに転換して見ていったときに、ミンデルのような認識の地平が生まれる。ここで意識・無意識という心のあり方と多次元的な身体性のあり方は密接にリンクすると考えることができる。

⁷ 同書、p.210

⁸ 同書、p.208. Scott Meredith: JUICE Radical Taiji Energetics (Kindle version), L.3194, Amazon Services International, 2012.

⁹ 中野由哲：武術の“根理”、BAB ジャパン、2016 および、同：本当に強くなる“一人稽古”、BAB ジャパン、

2020

¹⁰ 則本純佑：武道に学ぶ 楽な体の使い方 (Kindle)、Amazon Services International, 2018

¹¹ 保江邦夫：合気を掴む！(DVD)、BAB ジャパン、2011

¹² 中野：一人稽古、p.25

視線というものが、意識と身体性をつなぐリンクとなっているのだ（おそらくもう一つ、「呼吸」もそうしたリンクとなるだろう）。視線の変容によって、日常とは異なる身体性が呼び覚まされ、そのより微細な（エネルギー的な）身体性に対応する空間へと、空間への認識形式が変化するのでと考えられる。ある客観的な空間に対する認識方法が変わるということではない。そもそも認識形式を経由しない純粋な空間というものには存在しない。認識形式の変容は、即、空間そのものの変容であり、その変容した空間も、その次元において実在するのである。なおここで、認識形式とは「分節様式」とも言い換えることができる。

以上、相手とのエネルギー的な融合についての様々な考えを見てきたが、総じてどれも「より分節化を統合する方向へのベクトル」においてなされるものであることは共通しているのではないと思われる。この時、身体性についての統合と、意識のレベルにおける調和した状態はともに必要であるようだ。身法と心法は切り離すことはできない。そして、心身を統合する媒介として視線とイメージが重要であることが明らかとなった。

3 中心軸について

ここで、武術において言われる中心軸、正中線について考えてみたい。

ここでいう中心軸とは身体性の中心となっている垂直軸である。これは背骨の走行と近いものであるが、基本的には物理次元にあるものではなく、エネルギー的なものである。中心軸が整うということは武術あるいは運動においてたいへん重要視される。高岡英夫氏はこれを「センターの身体意識」と呼んでいる。これはエネルギー次元のものであるが、かといってエネルギーだけで整えられるものでもない。肉体次元で余分な力が抜け、全身が連動して動けるような調和した状態を作ることは前提条件として必要になる。

高岡氏の身体意識という概念は、意識と肉体をつなぐものである。つまり、意識がある形やパターンを取ることで、身体の動きがもたらされる。彼によれば、「身体と精神は身体意識を介して相互に浸透し合うものである」¹³。また、「身体意識は、身体と精神がオーバーフローする中間領域を、きわめてメカニカルに形成する機能構造」¹⁴だとも語られる。ここで高岡氏が言う「身体と精神がオーバーフローする中間領域」とは、本稿で言う微細身体性の領域であると思われる。身体意識は物質的な身体にいわば先行してある。つまりこれは心身二元論を超えた概念である。微細身体性の重要な特徴は、「意識と身体に分節化」が、物質的身体性ほど明瞭な二元論をなしていないということである。そこにはごくゆるい二元分化はある。だが、意識と身体性は相互浸透するのだ。こうした微細身体性とは、中

国の伝統医学で言われていた「気の身体」と同一のものであろう。

高岡氏の身体意識論の重要なところは、「微細身体性の次元にも構造的性、パターンは存在する」ということであろう。深い考えを持たない人々は、物質性の次元をひとたび超えると、とたんに無定形の流動の世界になってしまうと思いがちかもしれない。だが、そうではなく、人間の微細身体性にもはっきりとしたパターン化や構造がある。その中でも最も重要なものが中心軸あるいはセンターの機能構造である。

古来、このセンターの身体意識は、武道では正中線と言われ重要視されてきた。それは、「直立した時に天から地球の中心まで貫いている上下の意識のライン」¹⁵である。高岡氏は、腸腰筋やハムストリングを使えるなど身体運動の面での効用を詳しく解説しているが、今それは彼の著書に譲りここでは触れない。ここで着目したいのは、「天とつながる」という要素である。

ここで天というのはもちろん物理的な宇宙のことではなく、意識上の世界である。天から地球の中心までセンターが通ると、それは精神的な拡大、高揚をも意味するということがある。古来より聖人、偉人と言われた人はセンターが発達していたのではないか。高岡氏はそれを「センターが天の気を導くのではないか」と仮説的に論じている¹⁶。センターが通ると相手の無力化が生じることは則本純佑氏も述べている¹⁷。これまで論じてきたように、相手の無力化をもたらすためには自己の微細身体性のレベルにおいて「調和の状態」を達成し、それを相手に共鳴させることであるが、その時にセンターが通っていることによる「天の気」の導入とここで言われることが重要な関連を持っているのではなかろうか。

天の気とつながるということは気功法にはよくあるイメージである。天というイメージは、自分がいるところよりも次元が高い世界というイメージである。ここで、次元が高いというのは、言い換えれば「より原初の無分節に近接した方向にある」ということを意味している。

より精神的な意味を持つ身体の中心軸の概念として、ヨーガの思想における中心軸、すなわち「スシュムナー」というものがある。スシュムナーとは中央の脈管とも言え、エネルギーの通り道である。そのライン上に「チャクラ」が7つ並ぶ。ヨーガの考えでは、いちばん下のチャクラに眠っている「クンダリーニー」というエネルギーがスシュムナーを通して上昇し、頭から天上へと突き抜ける時、意識が爆発的に拡大するような覚醒が起こると考えられている。気功法ではスシュムナーに対応するものを「中脈」と呼ぶが、これはインドからヨーガの概念が中国に入ったものと見られる。

また、エリアーデの宗教学には「宇宙軸」(axis mundi)

¹³ 高岡英夫：センター・体軸・正中線、p.7、ベースボール・マガジン社、2005

¹⁴ 同書、p.8

¹⁵ 高岡英夫：究極の身体、p.80、講談社、2009

¹⁶ 高岡英夫：からだにはココロがある、p.125~128、講談

社、2006

¹⁷ 則本：前掲書

¹⁸ ミルチア・エリアーデ：聖と俗、法政大学出版局、2014 など

という概念があり、「天と地を結ぶ軸」という象徴が各文化に見られることが論じられている¹⁸。たとえば実在する山を宇宙軸に見立てて、山を登ることで精神的な次元を上昇するという体験を求める場合もある。また、諏訪大社の御柱など、日本のみならず世界中の文化に「柱を立てる」という儀式的、象徴的行動があるが、これらもイメージ的に「天と地をつなげる」という意図がある。日本で神々を数える単位として「柱」を使うのも、「宮柱を立てる」という行為が、天と地をつなげて神を地上に呼ぶ行為であることに由来するのではなかろうか。宮柱を立てることはその地点において天と地が結ばれ、その結果神々が地上とコンタクトを持ちうるのであって、その柱の立った地点がエリアーデの言う「世界の中心」となるのだ。こうした天地の軸という概念は、山、樹、建造物、柱、塔など、さまざまな形態で現れる。これらはいずれも、本稿の言葉で言えば、「より無分節へと向かうベクトル」を人間に呼び覚ますための文化的な仕掛けであるということになる。それが「天の気とつながる」ということの意味である。

だとすれば、身体に中心軸を天まで通すことは、自分自身を宇宙軸の媒体とすることになる。このことによって、無分節の調和と融合へと向かうベクトルが意識と身体性に満ちることとなる。

そもそも人間の意識の構造として、より無分節に近い方へと向かうベクトルと、分節化へ向かうというベクトルの二つがともに内在しており、そこに両者をつなぐ「軸」という意識が発生している。その意識が自己の身体性を形作る際にもその軸の意識が高岡英夫氏の言う意味での「身体意識」あるいはいかえれば微細身体性の次元において構造化している。またそれと同時に精神文化の面においては「宇宙軸」を表現する表象体系を生み出している。軸というものが身体性と精神文化の両者において重要なものとして存在するのは、それが無分節・分節のベクトルという、(井筒俊彦の哲学によれば) 存在世界の基本構造を反映するからだと考えられる。中国でいう陰陽など、世界の形成原理として二極性という表象がしばしば現れるのは、こうした二つのベクトルを表現したものであろう。

武術が、相手の対立意識を無化してその空間を対立のない次元に変容することを究極目的とするならば、無分節へ向かうベクトルを持つ「天の気」とつながることは極めて重要な意味を持つことになるだろう。大宇宙が小宇宙に反映するのである。

結び

相手が無力化するという現象を理解するためには、近代的世界観を超えた「無分節／分節」パラダイムに基づき、エネルギー的な性質を持つ微細身体性の次元を指定した上で、その次元における「融合」という現象をとらえることが必要であることが示された。透明な力と言われるものは、無分節へと向かうベクトルを呼び覚ますエネルギーであり、それが対立の無化へと導く。こうした技術が武術の中では伝承されてきた。それは人間の身体性の未知なる可能性を示唆するものではなかろうか。